
打倒！ サイレンジャー

鳥遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

打倒！ サイレンジャー

【Nコード】

N0959Q

【作者名】

鳥遊

【あらすじ】

僕、鈴木太郎には秘密があった。

超能力みたいな力を隠しながら日々を平穩に過ごしていた。

そんなある日、秘密を共有する、絶対負けないの能力をもつ友人のもとに女の子が降ってきた！

ごくごく平凡な能力者の僕と友人はその女の子を助けるために能力者バトルに巻き込まれていく。

女の子は僕になつかないし！ 敵は変な奴らだし！ 友人は最強で
平然としてるし！ 一体僕はどうなるんだろうか？

(前書き)

初投稿です。

いまいちネットでの書き方が未熟ですので、縦書きで読んでもらったほうが読みやすいと思います。

誤字脱字チェックはしたつもりですが、もしございましたらすみません。

少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

僕は静かに自室で正座をしながら本を読んでいた。

部屋は六畳程の広さでベッドとテーブルそして本棚だけがある簡素なものだ。テーブルの上には飲みかけのぬるくなってしまったお茶がグラスに入っており、その隣にはノートパソコンが置いてある。

僕はお茶に手を伸ばし、一口飲んだ。

「ありゃ、もうぬるくなってる」

僕は少し体に力を込めグラスを見た。

グラスはパキパキツと音をたてて凍っていった。

僕、鈴木太郎には秘密がある！

僕はわざわざ立ち上がりグラスを持っていない手で第一ボタンが開いた学ランの襟を引っ張るようにしポーズをとった。

僕には生まれつき超能力みたいな能力があり、なんでも思い通りに凍らせられる。

今まで生きてきた十七年間に似たような能力を持った人に何人かはあったことはあるが、所詮たった数人。親はすでに知って受け入れてくれているが学校の友人達にはとても言えない。

でも、唯一友人で僕的能力を知っているのが――

バタバタバタ！ ガチャン！

騒々しい音をたてて僕の部屋に断りもなしに入ってきた我が友人にして幼なじみ。彼だけが僕的能力を知り、そして彼自身も能力を持っている。

「……何してんだお前？」

僕の友人、このかずま殿数馬が僕の格好を見てなんか期待が織り交じった様な声で言った。

「え、えっと、ちょっとポージングの練習を……」

しまった！ ポーズをしたままだったのを忘れていた。

「なるほど。だからそんなにカッコイイことをしていたのか。なら

俺もっ！」

殿も殿で奇妙なポーズをとった。180cmある殿がやると栄える。一方僕はとっても背が低い。殿に簡単に見下ろされるくらいに。歳は一緒なのにこの差はなんだろう……。

「ゴホン、で今日はどうしたんだ？」

僕は襟から手を離し、お茶をテーブルに置くと冷静を装って殿に聞いた。

「そうそう。女の子が空から落ちてきた」

「へー、女の子が空から。なんだそんなことでわざわざってええっ！」

「太郎は期待通りの反応をするから面白いな。そう、あれは今日のような晴れた日のことだった」

殿は回想シーンに入るように部屋の窓から外を見た。

「殿、今日のようなって今日だろ」

「ん、ああそうだが回想シーンに入るにはこの台詞が必要だろ？」
殿が言うには学校からの帰り道、デパートの前を歩いていると、いきなり殿の上に落ちてきたそう。

「いやあ、すごいスピードで落ちてきてよお、俺じゃなきゃどっちも死んでたな。ハッハッハ」

「……殿、それは只の飛び降り自殺ってやつでは？」

「まあ、そうかもな。そこまで連れて来てるから直接聞くか」

「ん？ えっと、連れてきた。どこに？」

殿は意外そうな顔をして部屋の外を指差した。

僕は急いでドアを開け確認、女の子が倒れてる。

女の子は年は大体十一、二歳くらい。髪はショートカット、きれいな黄色のワンピースを着ており、その脇には大分年季が入った赤いランドセルが置かれていた。

僕は急いで部屋に戻り、

「殿！ 何連れてきてんだよ。誘拐か？」

「ハッハ。急に元気になったな太郎。別に誘拐じゃない。空から

降ってきたから拾っただけだ」

「誘拐でしょ！ だいたい180cmもある男が気絶してる小学生を連れてる絵がすでに犯罪だー」

「道中、知り合いに会ったが、いところで疲れて寝てるって言ったら納得してくれたぜ」

なるほど、それなら僕でも納得するかもしれない

「で、あの子はどうする気なんだ？」

「どうもしないよ。起きたら事情と家を聞いて帰す」

「ふーん。ちゃんと考えてたんだ」

僕の言葉に心外だなというふうな視線を浴びせて来たとき部屋の外で、

「きゃー！ きゃー！ ここはどこ？」

女の子の叫び声が聞こえた。

殿がゆっくり立ち上がると、ドアを開け首だけだして様子を見た。

「ぎゃー！ 変態！」

ドンという音の後、殿から「がふう」という音がもれ、殿は沈んでいった。大方押し戸のドアから首だけ出していたので、ドアを蹴られ首が挟まったのだろう。

「殿？ おーい、大丈夫か？」

殿はすつくと立ち上がると廊下に出、女の子の首根っこを捕まえ部屋へと戻ってきた。

女の子は「きゃー」と悲鳴を常にあげている。

女の子を僕のベッドへと座らせた殿はそのまま女の子を睨みつけながら仁王立ち。

ゴゴゴゴゴっていうような効果音が聞こえてきそうだった。

殿は両手をゆっくりとあげ、

「いいキックだった。感動した！」

殿は涙目になりながらも笑顔で左手は首をさする様にし、右手で親指を突き立てグッドジョブ！

女の子はびびっていたらしくベッドの奥の方までずりずりと下が

っていた。まああれは僕でも……いや、誰でもびびる。

「あ、あの」

ずっと悲鳴をあげていた気のする女の子がここで初めてちゃんと話した。

「ここはいったい？ 貴方達は……ハッ！ もしや私のかわいさに目がくらんだ悪の組織でここはそのアジト？ ああ！ お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許しください。私はこのロリコンさん達によって弄ばれたあげく殺されてしまうのです。およよ」

「僕はそんなことしない！」

「俺はそんなことしない！」

僕と殿はほぼ同時に叫んだ！

しかし、いまどき「およよ」と言って悲しむ子がいたのか。「ぎやふん」並みに珍しいと思うのは僕だけか？

「ここは僕の部屋で空から落ちてきた君を介抱するためにここまで連れてきたんだ！」

「そうなんですか。まあ、冗談は置いて、ロリコンのお兄さん達——」

「「ロリコンじゃない！」」

完全にハモッて僕達は叫んでいた。

「贅沢ですね。では中二病のお兄さん方ですみませんか？」

「「中二病でもない！」」

またしてもハモッた。ここまで息が合うのもなんか嫌だな……。

「ふ、甘いですね。その小さいお兄さんはいざ知らず、そののかいお兄さん。あなたは中二病です！ ヒロインを家にお持ちかえりい♪ は中二病なんですよ！」

「な、なんてこった……ああ、俺は中二病なのか……いや待て！ お前ヒロインなのか？ どう考えても違うだろ」

「空から降ってくるのはヒロインと昔から決まっています！ ということで私はヒロインです。そしてその私をキャッチ&お持ち帰りしたあなたは……この物語における、ロリコン&中二病キャラ

なのです。えっへん」

そう言うと女の子は満足そうに胸を突き出した。

「せめて、主人公も入れて欲しかった〜」

殿は崩れ落ちた。

僕はいい加減あきれて話を本筋に進めようと口を開いた。僕にとって殿のキャラの位置づけなんて所詮他人事だし、他に気になることもあったしね。

「とりあえず、いくつか質問したいんだけど……えっと、名前は何かかな？」

「名前を尋ねる時はそちらから名乗るのが礼儀でしょ」

小学生（推定）にピシャリと注意されてしまった。

「僕は鈴木太郎。十七歳、牡羊座のA型。趣味は読書。チャームポイントは白くて細い指」

僕は律儀に事細かく自己紹介した。

「あの、そこまで言われると少し気持ち悪いです」

「そ、そう……、あっ！ 殿も沈んでないで自己紹介しなよ……」

僕は殿と入れ替わりで崩れ落ちた。

「俺は最強にして最弱の漢、殿数馬だ。よろしく！」

「中二病っぽい自己紹介ですね」

殿は僕の隣までくると肩を思いつきり掴み、

「なあ、あいつ殴ってもいいかな？ いいよね。俺の能力なら致命打にならないし」

「拳を固めながら大の大人がそんな台詞言うな！ ダメに決まってるんだろ。僕の部屋で暴行事件とかふざけんな！」

僕は殿をなだめながら女の子の方へと向った。まだ名前すら聞いていない。せめてそれくらいは聞かないとな。

「君、名前は？」

「わからない」

女の子は首を振った。

ん？ おかしいな。名前がわからないのか？

「お家はどこかな？」

「わからない」

「いぬのおまわりさんか！」

「違います。まいごのこねちゃんです」

「十回クイズみたいなことすんな！」

十回クイズ。僕が小学校くらいのとき少しだけ流行ったやつだ。有名なのは、「ピザって十回言って」ってやつだが僕の学校ではこんなのもあった、「シャンデリアって十回言って」で十回言うと、「ガラスの靴をひろったのは？」とか「毒リンゴを食べたのは？」とかいう問題を出していた。この場合はシンデレラと言わせたいのだが、正解は王子様だし白雪姫だ。要するに穿った答えを用意しているクイズだ。

「で、名前は？」

十回クイズの説明が異常に長くなったが話を戻し、再び名前を聞いた。

「そうですね。もったいつけても仕方ないですね。いくら犯罪を起こしやすい十七歳でもこのプリチーなところちゃんを傷つけられるはずがありませんからね！」

「なんで十七歳が犯罪起こしやすいんだ？ 偏見だろ！」

「知らないんですか？ 十八になると報道に実名が出るんですよ。犯罪おかすなら少年Aで済む今のうちじゃないですか」

「こころちゃん、全員がそうだったら犯罪者だらけになるじゃん」

「なぜ私の名前を？ もしかしてストーリーカー！ 私をこんなところまで連れてきて何する気ですか！ あなたはこの物語における口リコン&ストーリーカーキャラですね。誰か助けて〜！」

僕は無言で殿の隣に再び向い、

「殿、殴っていいんじゃないかな」

僕は今までで一番の笑顔で殿にそう言った。

「おい、落ちつけ太郎。お前が切れると俺のテンションはどこに持っていけばいいんだ？ こういうのは止める奴がいて初めて成り立つ

んだろうが！」

殿は思いつきり学ランの襟元を持って僕を揺さぶった。

数分後。

落ちついた僕は再度こころちゃんの話を見こうと試みた。隣には殿もいる。

「えっと、こころちゃん。僕は全然怪しくないし、怖くないからねえ。信用して話してくれないかな？」

こころちゃんはじとーっと疑いの目を向けたまま、

「怪しい人は皆そういます」

ぷいっとそっぽを向かれた。殴ろうとしたのがまずかったな。

僕は諦めず笑顔で、そしてずっと気になっていたことを聞いた。

「じゃあ、こころちゃん。もう時間が経ちすぎて誰も覚えてないかもしれないけどさ、こころちゃんは何でここまで運んだのが殿だっ
てわかったんだい？ どっちが運んだか誰も言ってないよ」

「そ、それは……。あっそうです。おち——」

「落ちる時に見えた？ あのデパートなら結構な高さがあるよね。」

そんなところと同じ学ランの僕と殿を判別できるとは思えない。飛び降りとはほとんどの人が落ちてる途中で気絶するそうだけど、こころちゃんもその例に漏れず気絶していたし、どうやってわかるわけがないんだよ」

「運ばれているときに目が——」

「それもない。こころちゃんならその時点で暴れるでしょ？ まあそうだとってもそれなら僕達……まあ正確には殿が命の恩人だと判るわけだしってことで『言及する』と『信頼してもらう』の二択になるけど僕らは別にどっちでもいいしね。ねえ殿」

殿はボーっと聞いていたらしく慌てて、

「あ、ああそうだな」

と相槌を打った。まったく僕の一番の見せ場だっていうのに。

僕の言葉を聞いた後、急にこころちゃんは神妙になり、暫しの沈

黙の後、口を開いた。

「えっと、さっきまではふざけてごめんなさい」

こころちゃんは座ったまま頭を下げた。ちゃんと謝れる子なんだと僕はこのとき少しほっとしていた。

「私の名前は朴木心ほおのき こころと言います。歳は十二です。あ、あのー、お二人は、その変なことと思うかもしれませんが超能力みたいなものを持ってたりしませんか？」

僕は一瞬ドキツとした。隣の殿はそうでもなさそうだったけど。

僕が一瞬ためらっていると殿が、

「ああ、あるよ」

さらっと答えやがった！

まあ殿の能力は僕と違って殺し合いでもしないかぎり分かりづらいからな。基本的な能力に対するスタンスが違うのだ。

「やっぱり！」

こころちゃんは目を輝かせ立ち上がった。そして、

「私もそういう能力があるんです」

驚愕の事実。でも殿は先ほど同様、全然動揺していなかった。

「やっぱそうか」

殿の口からも驚愕の事実。気づいていたのか殿。

「気づいてなかったのか太郎？ だから、言ったじゃん。俺のところに落ちてきてなければどっちも死んでたって」

確かにそんな台詞はいつていたけど……。

「まあ、そんな偶然起きないって思ってたから能力があるって言うほうが納得するじゃん」

僕のお株が奪われた！

推理、交渉は僕の役目だと思っていたのに……。

殿は続けて、

「だからたぶん能力は感知系だろ」

こころちゃんはビックリしたようで口を大きく開けたままだった。「ハッ！ あまりのビックリにポカンとしてしまいました。それで

す。私は能力者の動きを認識することができるとは」

僕はこころちゃんの能力の説明を聞いていいなあと思っていた。なぜなら殿よりもさらに日常生活において能力を気にしなくていいからである。僕なんていつ能力が出ちゃうか気が気でないのに。

「お殿様はすごいですね」

殿はいつのまにかこころちゃんに小学生の頃つけられていたあだ名と同じあだ名で呼ばれていた。小学生はみんな考えること一緒なのか？

「それです。ねお殿様に最近滅多にいない名前の太郎さん。実は私とある組織に狙われてまして……デパートから飛び降りたのもその追っ手から逃げる為だったんです。私にはお殿様が来ているのがわかっていたので」

「ハッ。すげークレイジー。俺が受け止められない能力や無視する悪人だったらどうするつもりだったんだ？」

「私の能力はそういうのも全部わかるんです。でもこの能力の所為で狙われてるんです。おおよ」

あんまり切実に聞こえないのは僕だけだろうか。

しかし、さっき言ったことは撤回しよう。みんな能力でそれぞれの悩みがあるんだ。どんなものかに関わらず。

よし！ 僕達で守ってあげよう。

そう決意した僕の横で殿とこころちゃんはお互い赤外線でメールアドレスを交換していた。

「よしっ。これで敵が来たときに知らせてくれれば俺がいくから」

「はい！ お殿様頼もしいです。憧れます。シビれます」

「おう、何でもなくてもメールしていいからな」

ん？ あれ？ 僕置いてけぼりを食らってる？ 同じ部屋で一メートルも距離が無いのになんだこの距離感。

「えっと、あ、その、二人とも僕を忘れてない？」

「ああ、最近滅多にない名前の太郎さん。……長くて言いづらいですね。もう少し短い名前にしてください！」

「そっちが勝手に長くしてんだろ！」

僕は少し大きな声で怒鳴った。

「きゃー、お殿様怖いお兄ちゃんがいじめるー」

こころちゃんは殿を盾にするように後ろに隠れた。

いつの間にかえらく信用を得たな殿。

「まあまあ、太郎。落ちつけ、小さいこの言う事じゃないか」

「んー、まあそうだな。僕のことはちゃんと太郎って言ってくれよこころちゃん」

「仕方ないですね。では妥協案で滅太郎さんでそうですか？」

「なにそれ！ 地味にカッコイイけど！ でも、もうそれ僕じゃないから。誰だよ滅太郎って」

「最近滅多にいない名前の太郎さん。略して滅太郎さんです」

「そもそも略す名前じゃないから！ 太郎でいいじゃん。僕だって平凡だなどと思うけど人の名前で遊ぶな！」

「滅太郎さん。私平凡なんて一言も言ってないですよ。むしろ今の時代に太郎という名前をつけたご両親を尊敬します」

「だったら尚更人の名前で遊ぶな！ てか僕の両親バカにしてるだろ！ ああもう、僕の名前はこれ際なんでもいいや。でも僕の両親含め全国の太郎とつけたご両親に謝れ！」

「そんなつもりはなかったんですけど、まあそうとられてしまったのならそれは私が悪いですね。では、全国の太郎さんのご両親の方々ごめんなさい」

＊

まあ、何はともあれ僕と殿はこころちゃんを家に送り届けることにしたのだが（あ、ついでにあの後僕も赤外線でこころちゃんの連絡先を知った。きちんと赤外線では僕の名前鈴木太郎と行くはずなのだがなぜだかこころちゃんは打ち直していたな）。

「ねえ、こころちゃんの家はまだなの？」

「えっと、滅太郎さんおかしいんですが、本来ならとつくに着くはずなのに」

僕達はきちんと進んでいるこれは確かなんだけど、僕もさっきからあまり周りの風景が変わらないなと思っていた。

周りはどうってことのない住宅地でコンクリートの塀が並んでいる以外特に何もみえない狭い路地なので風景はどの道かわりばえないのだが、やはりここまではおかしい。

「なあ、殿はこれどう思う？ ん、殿？ おい、どこにいるんだ」
辺りを見回してもこころちゃん意外見えず、僕は自然とこころちゃんを庇うように動いていた。

緊張が走る。背中と手には薄っすらと汗を掻き、眼は耳は頭は今
の状況を少しでも早く理解すべくフルに働いていた。

――カサッ。

物音がした方向を見ると殿が顔以外露出している所の無い全身黒い
服装（といっても戦隊ものの変身後みたいに凝った服んだけどね）
の男を捕まえている。

すでに殿によって数発殴られているようだった。

「おゝい。太郎。いつものように止めよろしく！」

殿によって投げられた男を僕は条件反射と言ってもいいような動きでポケットからビンに入った水を取り出し、割ると手に氷のハンマーを作りその男に叩き込んだ。

「グッ、ハッ、なぜ、おらの能力が効かな、い！」

まあ、その男の言葉は僕達は基本無視して歩を進めた。

「ああ、今の奴、幻覚使いだったみたいだな」

殿は世間話でもするかのようにそう話し始めた。

「なるほど。だから僕達は軽く迷ってたんだ。まあそれにしても幻覚使いなんて殿とは一番相性が悪いね」

「俺は最強で最弱だからな。俺と相性がいいやつなんていねえよ」

「それもそうか。あ、でも殿ああいうときは余裕があるんだからちよっと待ってよ。またビン買わなきゃいけないじゃないか！ 手も

少し切れたし」

「あ、悪い悪い」

僕と殿の会話になぜかこころちゃんが入ってこない。今も俯いたまま歩いている。僕がこころちゃんに聞こうとすると、

「おい、俯いてどうした？ 疲れたのか？ ほらお殿様が肩車してやるぞ」

僕より先に殿が話しかけ、こころちゃんを肩車した。さっきまでならなんか反応してもよさそうなのに今もなんか沈んでいる。

「私、感知系の能力なのに今の方に全く気がつかないです。そのせいでお二人を危険な目に合わせかねませんでした」

それで落ち込んでたのか……。

「おい、こころちゃん」

「俺達は強いから心配すんな！」

ハッ、ここまでハモると嫌な感じから逆に楽しくなってくるな。

そんな話をしながらちやうど大通りに出たとき、

「盛り上がってるとこ悪いけどその娘をこっちにわたしてもらおうか」

ふと目をやると先ほどの男のように顔以外全身一色に統一された服装をしている男が二人。片方はノッポで水色。もう片方はチビで黄色だった。

「お前達的能力は粗方把握した。痛い目に会いたくなければ大人しく娘をさしだせ」

喋るのは常に水色の方らしい。

「いやだ。と言ったら？」

「ふっ、流石四天王ナンバー2。幻覚のクロを倒しただけはある」

……幻覚のクロ？ もしかしてさっきの奴？ ナンバー2なんだ。普通最弱が来るのがセオリーだと思うのだが、

「どうした、そちらのナイトも含め貴様ら全員ポカンとした顔をして、さてはクロからのダメージは私が思っているより重いのか？ だからそんな顔をしているんだな！ ハッハッハ。クロにはなんと

か勝ったもののこの、今の体力ではこの私ナンバー3の水のアオとナンバー4、電磁のキィ、この二人掛けでは勝てないとわかり絶望しているんだな」

僕達三人は一塊になりひそひそ話を始めた。

「なあ、あいつってそんな名前だったんだな」

「あ、殿も聞いてないんだ」

「残りの二人もなんかバカそうですね」

「とりあえずチャッチャと倒しますか。もう完全に日もくれちゃったしな」

「賛成！」

「反対の反対です」

「おしっ！　じゃ俺が黄色を太郎が水色な」

「OK　じゃ、僕がひとつ質問して敵が答えたら戦闘開始で」

僕達は立ち上がると一色の方々の方へ向きなおすと、

「あの〜ひとつ確認なんですけど、今この子能力が不安定みたいなんですけどそっちで頑張ってる黄色い人に関係ありますか？」

「ググっ、貴様、なぜ気がついた」

「いや、黄色い方だけ喋らなくて、しかも電磁ってなんかしてるようにしか見えなかったもんで」

「ふう、正解です」

「おい！　キィ能力を解くな」

「いや、もう関係ないでしょ。能力言って、姿も現したし、隠すものがないですよアオさん」

「うーん。それもそうか」

「自分の力は電気です。それで電磁波を張って感知を妨害してました」

「だってよ、こころちゃん。よかったな。あっちの妨害で能力が使えなくなってただけだ」

僕が喋り終わると、殿と僕は一斉に走り出した。

「なに！」

アオが不意を点かれたという感じで声をあげたが、すぐに僕へ水の塊を放ってきた。流石はナンバー3といったところかな。

でも、僕達の敵じゃない！

僕はまた水の入ったビンを取り出し、今回は蓋を開け自分の目の前に垂らし五角形の氷の盾を作った。

「そんな貧弱な盾なんぞ、このアオにかかればあ！」

先ほどの水の塊が氷の盾にぶつかった。結構な衝撃は来たが僕は何とか踏みとどまることが出来た。

——ピシッ。

「ふふっ、防いだのは誉めてやろうだがヒビが入ったようだな。ロボロじゃないか」

確かに僕の盾にはヒビが入った、が水は十分手に入った。すぐさま盾を修復し始めたそのとき、

「先ほどは不意打ちで技名が言えなかったが、今度は言わせてもらおうぞ！」

アオが両手で丸を作るようにすると水がみるみる溜まっていき、「アクア・インパクト！」

大量の水が僕めがけ剛速球で飛んできた。

「ふっ、1トンもの水が二百キロの速さで飛んでいくこの技を今だからつてこの技を避けたものはいない！」

僕はまだ軽くヒビの入った盾を構え直すと殿の方を見た。

殿はすでに敵に接近しており、キイの両肩を掴むとそのまま膝蹴りを入れた。

「カツ、じ、自分の攻撃を全部避けるなんて……」

殿は膝蹴りを入れた後、僕の方を見た。

こっちもOKだよ殿。僕はアイコンタクトで伝えた。

殿はキイの両肩から首周りに掴むところを変えると、

「うりいやあ！ 巴投げ！」

そうしてキイを僕の斜め後ろまで投げ飛ばした。

「グッ、エッ、ハアハア、キクっす。でも自分を離したのは間違いですね！」

キィはそう言って立ち上がった。

一方、僕の方と言うと、もう目の前にまで攻撃が迫って来ていた。もう避けるとかって距離ではないな。

「ふん、そんな盾貴様ごと粉々にしてくれるわ！」

——ガッ、ザザザザッ。

盾に水の塊がぶつかるが、僕は先ほど盾を構えなおしたんだ。水の塊を受け流せるように。

受け流した水の固まりは僕の斜め後方へ飛んでいった。そうキィのいる場所へ。

キィは両手を電気によりバチバチさせており、

「今度こそ喰らうっす！ トロピックスン、えっ？」

——ドボシャ。

アオの水を喰らい20メートルほど道路を転がっていった。

ことの成り行きをポカンと見ていたアオ。

「な、な、な、にゃにをしゅたあ！」

アオは動揺の為か言葉を噛み噛みだった。

優しい僕はそこは突っ込まず、今やったことを説明してあげることにする。

「氷が濡れてると滑るってのは有名な話。まだ修復途中に見えるけどこれが完成だったんだ。そして、強い力ほど受け流しやすい。要するに、ただ受け流したってだけでそう驚くことはないですよ。たまたまキィが居ただけなんですから。まあ、そちらの攻撃が強くなければこうはいかないんですけどね。速度、質量どれも僕の限界以上ですよ。一対一だったら僕なんて勝てないですね。でも、あっ！
右！」

アオは言われた通り右を見ると、アオの左頬に殿の鉄拳が決まった。

「ぐえっ、い、痛い。騙したな！」

「あ、ごめっ、こっちから見て右」

「別に敵に謝んなくてもいいだろ太郎」

「それもそうか。じゃいつもの様に止めと行きますか」

僕は氷の盾を持ちながら走った。

「僕さあ、いつも思うんだけど盾の形って防御だけじゃなく攻撃にも適してると思うんだよね」

五角形の尖った方を先にするとアオにぶつけた。

「バカな！ 私達が負けるなんて……ガハッ」

僕は殿の方に歩み寄るとハイタッチ。

「おい、こころちゃん無事か？」

「あ、はい」

「殿、こころちゃん、今の騒ぎで人が出てきちゃうから急いで逃げよう」

殿はこころちゃんを抱えると僕と一緒に走り出した。

＊

「ふう、ここまでくれば大丈夫でしょ」

なんだかんだ闇雲に逃げていたのでこころちゃんの家からは少し離れたところまで来てしまった。

「おい、太郎。ここ、俺達の高校じゃん」

「あ、本当だ！」

「ここがお二人の学び舎ですか。うちの近くでビックリです
そうなのか。僕はあとどれくらいかこころちゃんに聞いた。

「えっとこころちゃんの家はあとどれくらいかな？」

「そうですね、十分くらいですかね」

「お、適当に走ったわりに近くまで来たんだな」

「本当ならもう着いているんですが……」

珍しく殿の言葉にころちゃんが突っ込んだ。

「ハハッ。気にすんな。そういう日もある!」

「笑顔が明るすぎる!」

殿、明るすぎるよ。もう夜なのに。むしろ眩しいくらいだ。

「ところでお殿様、滅太郎さん。知ってますか? この学校ってもと死刑場なんですよ」

「そうなんだ」

僕も殿も別にこういう話題は平気なのでそのまま聞くと、

「二人とも驚かないんですね残念です」

「あ、いや、驚いたよ。なあ殿?」

「ああ、メツチャ驚いたぜ」

「慰めなんていりません! 欲しいのはお二人の恐れおののく表情です」

「……………」

ここにメツチャ性格悪い小学生がおる。

「怖い話から雑学に繋げるはずだったのにお二人の所為で台無しです!」

「えっと、それって学校が建てられるくらい広い敷地で安いところは墓場か死刑場くらいだから大体の学校はそうなるってやつ?」

「……………」

暫しの沈黙の後、僕の目の前に宙に浮く赤い物体が現れた。

——ドカッ。

「いったゝ!」

僕の顔面にこころちゃんのランドセルが直撃した。

「なにすんだ!」

「人の話を奪う奴は救急車に蹴られて死んでしまえばいいんです」

「救急車が蹴るの!? 車なら轢くだよな」

「ふっ、甘いですね。滅太郎さん。喰らえ!」

ペチンと僕の頬を叩くこころちゃん。手には何やら不恰好な物体

が。

「地味に痛い。何その手に持ってるの？」

暗い中よく見ると、

「救急車に足が生えてる……なにそれ！」

「知らないんですかトランスフォー〇——というオモチャですよ。残念ながら滅太郎さんを殺すほどの力はないですが」

「怖いこというな！ まあそのオモチャは知ってるよ、でもあれって車とかから人型のロボットになるやつだろ。そんな気味悪いのはもはや別ものだあ！」

「まあ、太郎、マク〇スみたいな感じだろ？」

殿が投げられたランドセルを拾いながら言う。

「変形して減速。道路でやったら足もげるだろ！ どんだけ必死なんだよ」

「たとえ全てを失っても男にはやらなくちゃならないときがあるんですよ」

「かっこいいこといって誤魔化すな。いきなりロボットが減速の為だって言って両足吹っ飛ばしたら子どもトラウマになるわ！」

ああ、なんか楽しい。でもこういう会話パートの時ってのは大体敵が来る前振りなんだよな。

「あっ！ お殿様、滅太郎さん。何か来ます！ 能力は——」

こころちゃんがそこまで言ったところで校庭に火の玉が落ちてきた。

「えっと、能力は、もうわかりますね……火です」

確かに明らかに能力は火だろう。

校庭の真ん中に落ちた火の玉の中からゆっくりと人影が出てきた。その人影がバツと手を払うと火の玉は跡形もなく消え、地面には焦げ後だけが残った。

僕が水を取り出し、身構えたその時、

——バン！

「え？ すでに攻撃は始まって、いた……？」

僕の胸の部分に突然、炎が発生し爆ぜていた。

そのまま僕は地面に倒れた。

「太郎おお！」

殿も持っていたところちゃんのランドセルが燃えていることから二人同時に攻撃されたのだろう。

人影がこちらにゆっくり向ってくるにつれ姿が見えてきた。

人影はこれまでの奴らと同じで全身一色の服を着ていた。色はもちろん赤だ。髪はオールバックで、なかなかダンディな顔つきをしている。

僕らの前に立ちはだかると、

「我はアカ。お前達が倒してくれた仲間たちの仇を取るため、我等の野望を叶えるため、お前達悪を討つ！」

「おいおい、なんで俺達が悪なんだ？ 女の子を捕まえようとしているそっちの方が悪だろ」

殿が喋りながらアカの前に出て行く。僕とところちゃんを庇うためだ。

僕は自分の力のなさを痛感しながら、応急処置で焼けた胸を凍らせていた。

殿とアカの間に緊張が走る。

先に動いたのはアカの方だった。

「ふっ、そうだな。傍からみたらこちらの方が悪に見えるかもしれない。だが我等の壮大な正義の野望を聞けばお前達も協力するかも知れぬな」

そう言ってアカは力を抜き、さらに説明をつづけた。

「我等の野望それは！ 五人で登場ポーズをつける事だ！」

アカはこぶしを握り、白熱しそう叫んだ。

殿、今のうちに殴ってもいいんじゃないか？

さらにアカはつづけ、

「我等が所属する組織は能力者による犯罪を防ぐため日々暗躍しているのだが、なにぶん四人と数が少なく、仕方なく四天王という形

式をとっているが本来は戦隊風に五人で登場したいのだよ。そして五人目として白羽の矢がたったのがそこにいる朴木心なのだよ。どうだ。これで我等が正義ということがわかってもらえただろうか？」

組織四人で今日会ったので全員じゃねえか！ 組織でもなんでもねえよ。それは。

僕は精一杯ツツコンでやりたかったが、胸が痛くまだ上手く喋れなかったため、心の中でツツコンだ。

「ああ、わかった……」

「ちっ……、と、の」

僕は今だに胸の痛みで声が上手く出なかった。

「ほお、話せばわかるな。ちゃんと五人揃った時の名前も用意してある。『エスパー戦隊 サイレンジャー』だ。どうだ良い名前だろう」

「お殿様、私こんな寂れたダサイ得体の知れない組織にはいるなんて嫌です！」

「ああ、奴らがどんだけバカかってことがわかったぜ！」

そう言うとお殿は拳を繰り出した。

「ふっ、不意打ちか。まさしく悪！」

アカは一步後ろに下がるだけで軽く殿の攻撃をかわした。しかし、殿は驚くでもなく踏み込みハイキックを放った。

アカもいたって落ちついて殿の蹴りを腕で受け止めたが、

「なっ？ 重い！」

アカはそのままぶっ飛ばされたが、すぐに起き上がり、

「くっ、炎よ！」

両手に炎を纏い、それを殿めがけ放った。

アカの方へ向っていた殿は炎を見ると、地面を蹴りステップしかわす。

炎は続けて幾つも放たれるがその度に殿は避けた。

「くくくっ、我がただ単に撃っていただけと思ったか？ 周りを見

てみる」

殿の周りはアカによって放たれた炎で囲われていた。

「これなら避けられまい」

アカの手の炎がみるみる青くなり、それを高速で撃ちだした。

闇の中、高速で迫る青い炎はほとんど見えず、僕は先ほど受けた攻撃はこれだったのだと瞬間的に理解した。

バンツと音をたてて殿へ直撃し、辺りは煙に包まれた。

「お殿様あ！」

こころちゃんが殿を心配し、叫んだ。

「が、あ……ごほっ、大丈夫、だ、よ。こころちゃん。あ、ああ、ごほっごほっ」

うん。よし！ だいぶ喋れるようになってきた。

「今の、攻撃はたぶんさっき僕が喰らったのと一緒にだ。アカはさっきの攻撃で殿が無事なのはランドセルに当たったからだと思ってる。でも、違うんだ。こころちゃんも殿の能力はなんとなくわかってるでしょ？」

「はい、私はそういう能力ですから。でも、いまいちわからないんです。『絶対に負けない』なんて能力ありえないです」

序々に煙は晴れていき、立っている人影が見えてきた。

「そう、殿の能力は『絶対に負けない』よって、相手に合わせ身体能力が向上し、相手の攻撃は最低限しか喰らわない。これは殿数馬っていう人物の『負け』に対しての考えが反映されていて、殿は戦えなくなることが『負け』だと思っている。だから殿は戦闘において負けない。勉強とか遊びでは負けるんだけどね。スタンスの違いだね。そして――」

そのとき煙は完全に晴れ、殿が左手を振っていた。

「お殿様！」

こころちゃんは殿の無事な姿を見てホッとしたようだった。

「あちち、袖が燃えちゃった」

「なに！ バカなあの炎を素手で受け止められるはずがない。最初

の攻撃より威力は数段上のはずなのに。貴様いったいどんな能力者だ！」

殿は何も言わず走り出した。

一瞬でアカとの距離を詰めると、

「俺は別に正義じゃねえから、正々堂々教える必要はねえ！」

殿の拳がアカの顔面をとらえた。

「はやっ！　ずるうベツ！　うつ、えっ」

顔を殴られたアカはゴロゴロと転がり、校舎にぶつかりようやく止まった。

その間殿は間髪いれず追いかけており、アカが止まり顔を起き上がらせた時にはすでに目の前におり、

「オラッ」

蹴りを力任せにかまし、アカは校舎にめり込んだ。

「かつはあ……くっ」

アカは殿を鋭く睨むと、雄たけびを上げ目の前に炎の渦を出した。

「はあ、はあ、はあ、流石にこの炎の渦は耐えられまい」

殿は完全に炎の渦に飲まれ見えなくなったが、

「うおおおおおおお！」

パンチ一発で炎の渦を打ち消し、出てきた。

「ばっ、バカナ、バカナバカナバカナバカナー」

アカは急いで殿と距離を取り、足に炎を纏い、その炎で空高く飛び上がった。

「サイレンジャーキイイク！」

アカは火の玉になり殿へ向かって行った。

殿はアカ、いや火の玉を見つめ、ギリギリまで引き付けたところで拳を振り下ろした。

「どっおせい！」

アカは殴られた衝撃により地面に叩きつけられた。

「……………あれ？」

地面に叩きつけられたアカは数秒の後、自身に起きた変化に気が

ついた。

「痛くない、だと」

アカは満身創痍で立ち上がると殿に炎を放った。

やはり、殿はステップし避けたが、攻撃に移る様子がない。

「滅太郎さん。あれは」

「ああ、殿のチートみたいな能力の弱点とも言える点。相手に合わせる能力ゆえに、相手が弱くなれば殿も弱くなる。つまり、『絶対に負けない』けど『絶対に勝てない』能力。だから――」

だから僕が止めを刺さなくてはいけないんだ。

僕は胸を押さえながら立ち上がると殿のもとへ向った。

「はあ、はあ、やっぱ動くのはキツイな」

僕は一步一步ゆっくりと近づいた。

「やあ、殿。バトンタッチだ」

「おう。大丈夫か？」

アカは未だに弱弱いながらも炎を纏い攻撃している。

「確かに、僕にあれを避けるのは無理だな」

「そうか、じゃ」

そう言うのと殿は僕の前に立ち、アカの放つ炎を受け止め消し去った。

僕らは一步一步アカに近づいていった。

殿は炎を消しながら、僕は水の入ったビンを取り出し凍らせ造形しながら。

そうして、アカの目の前までたどり着くと、

「くそっ！」

そう言ってアカは炎を纏った拳で殿へ攻撃するが、殿に軽く受け止められ、

「今だ！ 太郎！」

「ああ、わかってるよ！ 火にはこれだろ」

僕はフライパン形に凍らせた氷を構えた。

「ちよっと待て！ 君達も素晴らしい素質を持っている是非とも私

達の組織に入らないか？」

僕と殿は顔を見合わせアカに笑顔を見ると、

「「断る！」」

二人同時にそう言うって僕はアカの頭部を思いっきり叩いた。

——ゴンッ。

鈍い音をたてアカは倒れた。

「はぁ、やっとこれで終わりだな。殿」

「そうだな。もう時間も遅いし早いところろちゃんを届けようぜ」

＊

こころちゃんの家は学校から少ししたところにあり、庭付きの一軒家だった。僕と殿は無事送り届けることに成功。さらにこころちゃんを悩ましてた奴らも倒したし、百点満点の結果だろう。めでたし、めでたし。

「全然、めでたくないです！ 滅太郎さん。私のランドセルが消し炭に……。責任とってください」

「ちょっと待てよ。それやったの殿だろ」

「お殿様はその分戦闘で働きました」

「なにそれ、僕の方が重症なのに！ 死者にムチ打つのかこの小学生は！」

「死んでないじゃないですか。流石に私でも死者にムチ打つなんて真似しませんよ。そんなムチ打つような死者がいたら私は滅太郎さんを囷にして逃げます」

「死者ってゾンビかよ！ 違うぞこころちゃん。相手は死体だ。動かないぞ」

「そうなんですか？ まあ知ってましたが」

「わざとか！」

「はい。それに実際、六年生なのでもうランドセルじゃなくてもいいので弁償とかは別にいいですよ」

僕は小学生に虐められてる。

今はもうころちゃんの家の前まで来ており、後はチャイムでも押して、ご両親にころちゃんを届ければよく、僕達は最後に他愛もない会話をしていた。

殿が会話に参加しなかったのは、未だになんとかランドセルを直せないか僕の隣で尽力していたからだ。燃えたのはどう頑張っても無理だと思うのだが。

とりあえず、殿はおいという僕はチャイムを押した。

——ピンポーン。

「はい」

澄んだ声が聞こえてきた。たぶんころちゃんのお母さんなのだろう。

ドアが開くと、

「心！」

お母さんが勢いよく飛び出し、僕らを見た。

「……キャー、変態！」

ころちゃんのお母さんはキレイな回し蹴りを殿めがけ放った。殿は依然ランドセルを見ており、蹴りに気づいていない様だったのだが、なぜかひょいっと避けた。

蹴りはそのまま止まることなく殿の隣にいる僕へ。

なんで殿避けるんだよ！

「ベボッ！」

蹴りは僕の側頭部に当たり庭の方へまで転がった。

「お母さん、やめてください。この人は私を助けてくれたんです」
なぜ、ころちゃん殿だけ紹介？ 僕も頑張ったよな。

「そうなの？ あら、あたしったらごめんなさいね。でも胸をポツカリあけた男子高校生とランドセルを大切そうに抱える男子高校生が年端の行かない娘の横にいたら勘違いしちゃうわよね」

僕は自分の格好を確認する。アカにやられ胸が露出、というか上

半身は学ランをボタン全開で裸の上に着てるようなファンキーな格好になっていた。一方殿は学ランが半袖になっている程度で大して変な格好ではないだろう。ランドセルは変だけど。

「えっと、お二人ともお茶でも……」

こころちゃんのお母さんは今更ながら僕達をお客様扱いしてくれたが、僕達は丁重にお断りし帰ることにした。

殿はなんていう顔をしていたが、殿は大して怪我していないが僕は重傷なんだよ。

最後別れ際にこころちゃんが、

「今日はありがとうございました。殿さん。数馬さん」

最後の最後であだ名じゃなくちゃんとした名前で呼んでくれ……。

「おい！ 両方とも殿じゃねえか！ 僕は？」

「冗談です。ありがとうございます。太郎さん」

僕と殿は笑顔で別れを告げた。

＊

翌日、僕は代えの学ランを着ると学校へ向った。

いかに傷が酷くとも僕の栄光の皆勤賞を邪魔することは出来ん！

道中、僕は視線を感じたが気のせいだと思い歩く。

追いかけてくる足音も聞こえたが幻聴だと思い歩く。

途中、殿と合流する。

殿としばらく歩くが、視線も足音もあり、明らかに気のせいとかではなかった。

「殿……」

「ああ、これは……」

僕達は視線を感じ、足音も聞き、そして姿も見えていたが無視！

実は家を出てからずっとこんな調子だった。

僕の後ろには黒い服を着た男が、『我等の組織に入りませんか？』というプラカードを持ってずっと着いてくる。一方殿の方はこれま

た同じプラカードを持った、青い服装の男と黄色い服装の男が着いていた。

とりあえず、僕達はひたすら無視しそのまま学校まで行くと、そこで尾行者は離れていった。

そんなことが一週間ほど続いたある日。

学校へ行くとなんでも教師の一人が産休を取ることで、代わりの先生が来るとのことです。全校集会が朝に開かれた。

嫌な予感がする。

僕達が体育館へ移動すると、教頭先生が壇上にあがり話し始めた。「皆さんもご存知とは思いますが、〇〇先生がこれからしばらく産休を取る事になりました。その間、代理を務める先生を今日はご紹介します」

一人の男が壇上に登り教頭先生の隣へ立ち、挨拶をした。

「この度、代理教諭を勤めさせていただく紅^{くれな}焦^{しょう}と申します。皆さん短い間ですがよろしく願います」

紅先生はグレーのスーツを着ているのだが、ネクタイは赤を基調にしていたり、腕時計の文字盤の数字が赤かったりとところどころに赤が使われていた。

そしてオールバックにした髪形に、ダンディな顔つき。

「あ、そうです。最後に、殿数馬くんと鈴木太郎くん。我は君たちをスカウトに来た！ そのことを忘れないでもら、おうっ！」

全部言い終わらないうちに紅先生もといアカは他の先生方により壇上から下ろされた。

「「しつこすぎる！」」

僕と殿は同時に言い、只でさえ集まっていた視線がさらに集まることになった。

確かにここまでされたら、デパートの屋上から飛び降りても逃げようと思うな。

こうして、僕の実力による悩みがまた一つ増えた。

(完)

(後書き)

はじめまして、鳥が遊ぶと書いてタカナシです。

いたらない部分があると思いますが、楽しんでいただけたでしょうか？

感想などもらえたら嬉しい限りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0959q/>

打倒！ サイレンジャー

2011年1月10日23時40分発行